

子供ど真ん中の学校

～かがやく海が見える丘より～

令和8年6月8日
長崎市立畝刈小学校
学校だより NO. 44
校長 田中 成年

＜子供ど真ん中教育＞

～被爆体験講話～

毎年行っている被爆体験講話を行いました。年々減少している被爆者の方からの貴重なお話を聞く時間になります。今年度も4年生から6年生が体育館に集まり、お話を聞きました。



今年度は、直接原爆にあった方ではなく、被爆した方のお孫さんに当たる被爆3世の方に講話者としてお越しいただきました。

語り部として、2011年より国内外で亡き祖父の被爆体験と非核平和の継承を紙芝居やドキュメンタリー映像や著作の朗読を用いて多くの方々に語り継いでおられます。



今回も、紙芝居やドキュメンタリー映像を用いて、子供たちに祖父の被爆体験をもとに原子爆弾の恐ろしさや愚かさ、自身の非核平和活動についてお話をいただきました。

「祖父は8月6日広島と8月9日長崎で被爆した二重被爆者」

「平和学習の際に6歳の時に初めて祖父から被爆したことを伝えられた」
という話から始まりました。



投下された時のことを想像してほしい

なぜ広島と長崎の2か所に落とされたのか 「日本は試された」

投下後の放射線の人体への影響

けがもしていないのに次々と人が死んでいく 髪が抜けていく

原子爆弾のことを全国に知らない人がたくさんいる中での投下後の「差別」

原爆投下への「憎しみ、悲しみ、苦しみ」「核兵器はいらない」



二重被爆者である祖父は、様々な非核平和活動の中で「命をバトンタッチしたい」
「私は役目を果たした」と力強く言い残している。



被爆3世の講話者の方は、子供たちに分かりやすく、そして最後まで力強い口調で、
子供たちに語り掛けてくださいました。



被爆者の方のお話はたくさんお聞きしてきましたが、これまで二重被爆者の方のお話は聞くことがありませんでした。

これからの平和の継承者である子供たちは、貴重な話を前に静かに耳を傾け、最後までしっかりと話を聞くことができていました。

命のバトンを受け継ぎ、平和を守り続ける決意をした子供たちでした。

畝刈小学校は、子供が主語・子供が主役

「子供ど真ん中」の学校

「豊かな心を持ち、平和を語り継ぐ子供たち」を支えています。